

2022年1月16日（日）

宣教 『その言葉のゆえに』

聖書：マルコによる福音書7章：24～30節

今日の聖書の個所の小見出しは、「シリア・フェニキアの女の信仰」とつけられています。これは、聖書を日本語に訳した方が、内容を理解しやすいようにつけてくださったのです。この小見出しがある方がよいとか、必要ないとかの意見もあるようですが、わたしはあっても良いのではないだろうかと思っています。とにかく今日の個所「シリア・フェニキアの女の信仰」の物語、出来事は一度読んだら記憶に残る個所の一つだと思います。

さてイススはユダヤ・イスラエルのガリラヤ地方からティルス地方に行かれました。ティルス地方は、聖書の後ろに地図がありますが、地中海に面している地方です。ティルスは、とても古い町で紀元前2000年ごろから栄えていた港町です。口語訳聖書ではツロと呼ばれています。ユダヤ・イスラエルの人々からみれば、外国の地に当たり、異邦人の地とみなされていました。この時、この個所には書いてはありませんが、おそらく弟子たちも一緒だったのではないかと思います。ちなみにこの個所と内容の似た個所は、マタイによる福音書の15章21節～28節にもあります。こういう内容の似た聖書個所は「平行記事」「平行個所」と呼ばれます。特にイエスさまの生涯を伝えている福音書に多くあります。この旅の目的は、ガリラヤ地方での忙しから抜け出して、しばしの休息の時を得ることであったのかもしれませんが。

と一緒に聖書の言葉に心の耳を傾けて、愛なる神さまの声を心に聞きたいと願います。

24:イエスはそこを立ち去って、ティルス地方に行かれた。ある家に入り、だれにも知られたくないと思っておられたが、人々に気づかれてしまった。

イエスは、この地方にも知り合いがあったのか、ある家に入られました。「だれにも知られたくないと思っておられたが、人々に気づかれてしまった。」とあります。神の子イエスのことは、もうこの地方まで届いていたのです。イエスはこの地でも隠れていることが出来なかったのです。

そこに、

25:汚れた霊に取りつかれた幼い娘を持つ女が、すぐにイエスのことを聞きつけ、来てその足もとにひれ伏した。

約2000年前当時、今日では間違った考えですが、重い体の病や心の病は、悪い霊に、汚れた霊に取りつかれているのだとの思いや考えが支配していたのです。このような考えは多くの人たちを苦しめることにもなりました。今日でもまだあることではないでしょうか。神の子イエスさまはそのような考え方を打ち消されたのです。むしろ、神の栄光が表れる時、病気の人が神さまに用いられるのだと言われたのです。これが、良き知らせ、福音であり、神さまの救いなのです。そのようなイエスを受け入れない人たちも現実にはいました。

26:女はギリシア人でシリア・フェニキアの生まれであったが、娘から悪霊を追い出してくださいと頼んだ。イエスのことを聞きつけてある女が一人でその家にやって来たのです。かなりの勇気が必要だったことでしょう。そうせずにはおれなかったのです。

ここからドラマチックな展開が現実起こって行きました。

女は、家に入るやイエスの足もとにひれ伏して、娘から悪霊を追い出してくださいと頼んだのです。ここには、我が子を思い、必死でイエスに頼む母親の姿があります。

きっとこの子が癒されるなら、自分はどうなっても、たとえ身代わりに死んでも良いくらいの気持ちだったのではないか、またこの子が召されるまでは自分は一日でも長く生かして欲しいとの願いもあったことと想像するのです。

子ども守り抜く母、「海より深い母の愛」と言われます。

その女に対して、

27:イエスは言われた。「まず、子供たちに十分食べさせなければなら
ない。子供たちのパンを取って、小犬にやってはいけない。」

ちょっとイエスさま、冷たいのではないですか、と聖書を読み出した頃思った記憶があります。この言葉の解説で良く言われるのは、子供たちというのは、イエスさまと同じ民族のイスラエル人・ユダヤ人のこと、子犬というのは外国人のこと。ちなみに2000年前当時、多くのユダヤ人は、自分たちを支配していたローマ人を「犬」と呼んでいたようです。子犬という呼びかたもあまり良い呼び方ではなかったとも言われています。

ただ子犬とは、家で飼われた愛犬のような存在だったのではという受けとめかたもあります。

さて、女とイエスの出会いの姿は、ここからです。

イエスのことばを聞いた女は、決して引き下がりませんでした。

28:ところが、女は答えて言った。「主よ、しかし、食卓の下の小犬も、
子供のパン屑はいただきます。」

女はイエスに「主よ」と呼びかけます。マルコによる福音書では、人がイエスに対して神さまに呼びかける「主よ」というのは弟子たちを含めてこの個所だけだと言われます。この救いを求める女性は心と魂をまっすぐにイエスさまに向け、しっかりと向かい合っているのです。言わば真剣勝負です。旧約聖書にある、神さまと一晩中相撲をとった族長ヤコブのことを思い出します。女の思い気迫は、

28:ところが、女は答えて言った。「主よ、しかし、食卓の下の小犬も、子供のパン屑はいただきます。」という言葉となり表れました。

ここに私は女の謙虚さと大胆さを見る思いがするのです。

いかがでしょうか？つまり、イエスさま、あなたの恵みは、この救いを待ち焦がれる食卓の下の小犬のような存在のわたしにも及ぶはずです。あなたの恵みはそれほど広く、大きいのです、との信仰の告白とも言えるように受けとめます。女は恵みのパン屑を信頼して、切に求めるのです。このような女の姿勢と言葉に主イエスは激しく胸を打たれたのではないのでしょうか！

29:そこで、イエスは言われた。「それほど言うなら、よろしい。家に帰りなさい。悪霊はあなたの娘からもう出てしまった。」

「それほど言うなら、」という言葉は、新約聖書の実語であるギリシア語の日本語への直訳では「その言葉のゆえに」となります。「その言葉のゆえに」！イエスは女の言葉、態度に心揺さぶられ関心し、脱帽され、激しく感動されたのだと思います。

この時から救いの恵みの出来事は、女と娘、家族の上に起こって行ったのです。

30:女が家に帰ってみると、その子は床の上に寝ており、悪霊は出てしまっていた。

女が家に帰ると「娘は床に横たわり寝ており、すでに悪霊は出てしまっていたのです。」。母と娘の上に、イエス愛、神さまの憐みの光が注がれて行ったのです。神さまの平安に包まれて生きて行く家族となって行ったということです。十字架に死んでくださったイエスは、苦しみの中を生きる者と共にいてくださるのです。そして復活の希望を与えてくださっているのです。

神の救いの働きは、ここに共にいる私たちの上にも起こって来たし、起こっているし、起こって行くことなのです。

全能の主なる神は求める者に、たとえ困難と病の中でも、最善を成してくださるのです。そして日々主にある希望を失うことなく、新たに生かし続けてくださるのです。主の恵みのパン屑は求める者と共にすでにあるのです。

「わが恵み汝に足れり」「わたしの恵みはあなたに十分である。」との伝道者パウロの聞いた主の言葉は今も鳴り響いているのです。

◆シリア・フェニキアの女の信仰

24:イエスはそこを立ち去って、ティルスの方に行かれた。ある家に入り、だれにも知られたくないと思っておられたが、人々に気づかれてしまった。

25:汚れた霊に取りつかれた幼い娘を持つ女が、すぐにイエスのことを聞きつけ、来てその足もとにひれ伏した。

26:女はギリシア人でシリア・フェニキアの生まれであったが、娘から悪霊を追い出してくださいと頼んだ。

27:イエスは言われた。「まず、子供たちに十分食べさせなければならぬ。子供たちのパンを取って、小犬にやってはいけない。」

28:ところが、女は答えて言った。「主よ、しかし、食卓の下の小犬も、子供のパン屑はいただきます。」

29:そこで、イエスは言われた。「それほど言うなら、よろしい。家に帰りなさい。悪霊はあなたの娘からもう出てしまった。」

30:女が家に帰ってみると、その子は床の上に寝ており、悪霊は出てしまっていた。